# 巻頭言

今や絶学無為の閑人の境にあるわたしの心に東方キリスト教研究『エイコーン』と『パトリスティカ』が誕生し産声をあげた頃のことが妙に思い出されてならない。

それと共にこれら教父研究雑誌を立ち上げた仲間やそれまでの歴史を感慨深くかえりみるのである。

ケーベル博士などの尽力によって本邦に根付いたギリシア〈哲学〉研究に基づき、アウグスティヌスやトマス研究も進展した。それは京都大学の中世哲学講座で教えられた山田晶先生や九州大学の稲垣良典先生の精進の賜といえる。特に京大大学院からは陸続としてアウグスティヌスやトマス研究者が旅立ち、日本中世哲学の中核をなしていった。

そうしたギリシア哲学研究やいわばキリスト教思想研究を深め、そこを土台としてギリシア教父研究が上述の二研究誌の刊行も含めて開闢したといえよう。

筆者子の記憶では、ニュッサのグレゴリオスの『雅歌講話』、次いで谷隆一郎訳の『モーセの生涯』や熊田陽一郎訳のディオニシオス・アレオパギテース『神名論』『神秘神学』が世に現れ、向学に燃える若者の眼差しをギリシア教父に向ける転換点となったように思われる。そしてK・リーゼンフーバー師差配の『中

世思想原典集成』の1～3巻でギリシア教父全般が紹介され、これを機に翻訳者はその後教父学研究をさらに押し進めていった。

本邦にギリシア教父研究が定着したといってもよい時代であった。

今日ギリシア教父研究者が各大学や研究所で教えさらに後輩を育てるまでに至っている。ただしこの希望にやや影がさしていないといえば気休めになろう。というのも、文科省による大学改革の名の下に、各大学では聖書も含めて古典研究の講座やプログラムが削られてゆき、教父や中世トマスのゼミ開講は不可能になってきているからである。

それならばどうすればよいのだろうか。

一つには、どこか研究室などの部屋を拝借し、そこで有志の先生や学生が研究会を定期的にひらくことが重要だと考えられる。

二つには、教父研究会、東方キリスト教学会、中世哲学会などを根気強く続け、様々な発想や開拓などを通して励ましと霊発とを若い世代と共有すれば「飛火から火花がとび移るように」（プラトン『第七書簡』）教父の愛智は若人の魂に燃え移るであろう。

筆者子のこのような老婆心と危機感とを最近雲散霧消にしてくれたのが、田島照久・阿部善彦編『テオーシス　東方・西方教会における人間神化思想の伝統』教友社、二〇一八年であった。感謝申し上げたい。

またこれまで『パトリスティカ』読者諸兄のお耳を汚してきたくり言も寛き心でおうけとめ下さいますように。

処暑　長月　燈燈無尽

宮本　久雄

※編集室からのお知らせ

『パトリスティカ』は今号からオンライン刊行を開始します。ただし、完全にオンラインに移行するわけではなく、今号以降、一年おきに紙媒体での刊行も続けていく予定です。また、紙媒体での刊行の際には、前年度のオンライン刊行分と併せて、毎回合併号として発行していくことになります。時代の移り変わりに際し、本誌の形もまた少しずつ変わっていくことになりますが、そのような変化の中にあっても、創刊より変わらない志をつらぬいて参ります。読者の皆様には、今後とも『パトリスティカ』の刊行にご支援ご協力いただきますようお願い申し上げます。